

## 内子町の国際交流への取り組み



内子町教育委員会 自治・学習課 主査 久保 理恵子

### 1. はじめに

内子町は愛媛県のほぼ中央部に位置し、松山市から南西約40kmの地点にあたる。小田深山をはじめとする豊かな自然の中で、町内各地の特色ある地域文化を大切に、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された町並み保存や棚田などの農村景観保全、農産物の直売所、グリーンツーリズムなどの観光産業や第一次産業の活性化などの取り組みに力を入れており、小規模であっても、生き生きと輝く町をめざしている。この姿勢と町の将来像を描き、「町並み、村並み、山並みが美しい持続的に発展するまち内子町」をキャッチフレーズにまちづくりを進めている。

国際交流の分野では、1984年から内子町海外研修補助制度を導入し、海外で研修を行う町民を支援してきた。その後の1986年に開催した「内子シンポジウム'86」を皮切りに国際交流の機運が高まり、1994年には財団法人内子町国際交流協会を設立、町の国際交流窓口と協会が連携し、「まちづくりは人づくり」「Face to Face」を基本理念に町民の国際交流・国際理解活動を支援している。

### 2. ドイツ・ローテンブルク市との交流

今年、内子町とローテンブルク市が出会って30年、姉妹都市盟約締結5周年の節目の年である。世界的に有名なローテンブルク市と姉妹都市盟約締結を望むまちはたくさんあるが、2011年9月、ロシア・ススダル市、フランス・アティスモン市に続いて3番目にアジアで初めて姉妹都市盟約を締結した。

ローテンブルク市と交流が始まったきっかけは、今から30年前の1986年までさかのぼる。内子町は1970年代から町並み保存運動を開始した。当時、岐阜県妻籠や高山などで取り組まれていた町並み保存は日本ではまだまだ

歴史の浅い、始まったばかりの考え方であった。しかし、町並み保存をしながらまちづくりをしていくことは世界において常識の考え方であることを町民に知ってもらうために、第二次世界大戦の際に街の約40%が破壊されてしまったが、過去の歴史や文化を大切にしながら、中世の町並み保存の取り組みで世界的に有名であるローテンブルク市から当時の市長を招へいして木造の芝居小屋「内子座」で“町並み保存とまちづくり”をテーマに「内子シンポジウム'86」を開催した。シンポジウムでは、ローテンブルク市が市民と協働しながら、積極的に中世の町並みを復元する取り組みを実施してきたことについて詳しい話を聞くことができた。



写真① 調印式 in ローテンブルク

このとき、普通なら「きれいなホテルに宿泊していたらこう」という流れになるところだが、市長ご夫妻に当時の町長宅に宿泊していただくことになった。現在で言うとホームステイだ。今から30年ほど前のことであるから、ホームステイはまだまだ一般的なものではなかったが、「内子流のおもてなし」を受けていただいた。この体験やシンポジウム会場であった内子座が木造の芝居小屋であったことも市長にとっては大変印象に残ったようで、帰国後ドイツの新聞で「たびたび日本には行った

が、内子の町で初めて日本の文化に触れることができた」と語られた。このことにより、両市町の交流が始まった。



写真② 内子シンポジウム '86



写真③ オスカー・シューバルトご夫妻

1994年には町並保存を学ぶため町職員（1年）とハム職人を目指す若者（3年半）が、2003年には環境を学ぶため町職員（1年1ヶ月）がローテンブルク市で学び、また、市長・町長や議員などの公式訪問のほか、市民・町民の相互訪問、青少年海外派遣など様々な分野で、ホームステイなどを通して草の根の交流が続けられている。

### 3. 財団法人内子町国際交流協会の設立

こうしたローテンブルク市との相互交流を行う中で、国際交流の必要性や重要性が少しずつではあるが、町民に芽生えはじめ、1993年に“地方の国際化とは何か”をテーマに「内子町国際交流シンポジウム'93」を開催した。このことにより、「町民が主役となる国際交流活動の母体となる協会を作ろう」という機運が町民などに高まり、翌年に財団法人内子町国際交流協会を設立した。財団法人としての設立は県内で3番目、町単位では

初めてのことであった。

設立にあたっては、「町民が主役、多くの町民に参加してもらいたい」という意向があり、町民有志が町民一人ひとりに協会で作成したパンフレットを手に説明して回り、活動に必要な資金を5年間で1億円集めようという目標を立て、一口3,000円を目安に募った。その結果、町内の184の事業所（建設業、商業、工業部会など）、約1,500を超える個人及び、8団体から約1億円の資金が寄せられた。このような町民の熱意を受け、町（行政）も町民から集まった額と同額の1億円を当時の国の施策「ふるさと創生事業」を財源として出捐<sup>しゅつえん</sup>して合計2億円の基金を創設して国債を買い付け、その利息を主な財源として運営を始めた。

「国際化社会とは」「国際交流とは」どういうことか、どうあるべきかを町民自身が考え共通理解を図りながら、各種の国際交流事業を広範囲に、また積極的に推進・展開していくための交流組織として、また国際的な視野と実践力を備えた人材を育成するとともに、世界の人々との相互理解と友好親善を図り、合い言葉は「Face to Face」をモットーに町民の福祉の増進と活力ある地域社会の形成に寄与することを目的として活動している。協会の英語表記である「UCHIKO TOWN INTERNATIONAL ASSOCIATION」のそれぞれの頭の文字「UTIA」をとり「ハートフル・ゆうていあ」の愛称で町民に親しまれており、愛称「ゆうていあ」には、内子町の方言で、“みんなに言うてや（ゆうてや）！”（皆さんに言ってください、広めてください）という意味も含んでいる。また、平成25年4月からは公益財団法人に移行し、より公益性の高い事業を目指して活動している。



ゆうていあマーク

#### 4. 青少年海外派遣事業

協会の中心的な活動の一つに、青少年海外派遣事業がある。国際的視野を有する人材を育成し、町の地域活性化や、諸外国との友好親善・相互理解・国際協力に寄与することを目的として、内子町の将来を担う青少年（中学生・高校生）を姉妹都市ローテンブルク市等に派遣している。



写真④ 第20回青少年海外派遣事業

現地では「生きた学び」を得られるよう、ホームステイを通じた日常生活体験、町並保存や環境保全の学習、学校訪問による現地の青少年との交流、警察署や消防署・博物館見学、工房体験などの多彩な体験・交流活動を行う。



写真⑤ 工房体験（鋳造工房）

また広く世界を見聞し多様な価値観に触れることで、より豊かな国際感覚を身に付けることを目的に、第2訪問地としてローテンブルク市とは異なる歴史や文化を持つ都市を訪れる。これまでに訪れた第2訪問地は、ヨー

ロッパを中心に13カ国18都市に及ぶ。協会設立翌年の1995年より毎年10数名を派遣しており、今年度で21回を数え、派遣生は275名となった。数字的には、町民の1.5%が派遣を経験した計算となる。派遣生は海外での様々な体験や経験を通して、国際理解を深め、世界的な視野で物事を理解し行動できる力を身につけている。派遣生の多くは、帰国後海外に目を向けるようになっただけでなく、「日本の文化や内子の町を誇れるようになった」「内子に生まれてよかった」と世界を知ることであらためて自分を見つめ直し、新たな気持ちで世の中と向き合えるようになっている。

昨年度には、初めて派遣団OB・OG会「BIG HANDS」交流会を実施した。参加者は再会を喜び、ドイツ料理を囲んで当時の思い出や近況などを語り合った。また「海外派遣事業の歴史を感じた。自分もそれに関わったことがうれしい」「先輩方が海外派遣の経験を生かした仕事をしていて、すごいと思った」「海外派遣での経験が今の自分にどう生かされていて、どれだけ良い経験だったのか、あらためて実感できた」など、事業を振り返っての感想などが寄せられた。



写真⑥ 2014年8月海外派遣OB・OG交流会

派遣OB・OGの現在を辿ると、町内で英語教員として勤務している者、旅行会社に就職して世界を仕事場としている者、協会プランナー（ボランティアスタッフ）として活動している者、中には大学で国際文化や英文学を専門に学んだりドイツ留学したりするなど、派遣事業は確実に彼らに鮮やかな影響を与えている。町内外を問わずそれぞれの分野で活躍する彼らの姿は21年間継続している本事業の最大の成果ともいえるであろう。

今後は、協会と派遣OB・OGとの繋がりを強化し、

本事業を通して得た絆や経験を未来に向けて持続的に生かしていくシステムを構築することが大切である。

### 5. 青少年海外派遣事業以外の国際交流協会の活動

協会では、青少年海外派遣事業のほかにも子どもから高齢者までが気軽に参加できる事業や外国語講座、国際理解講座などを企画・実施している。内子町在住のALT（外国語指導助手）やCIR（国際交流員）による事業を実施したり、町内で開催される様々なイベントへの参加を通し、町民や在住外国人と楽しく触れ合いながら、協会活動をPRしたり参加した外国人に日本文化を紹介したりする良い機会となっている。



写真⑦ 子どもフェスティバルで人気のフェイスペインティングコーナー

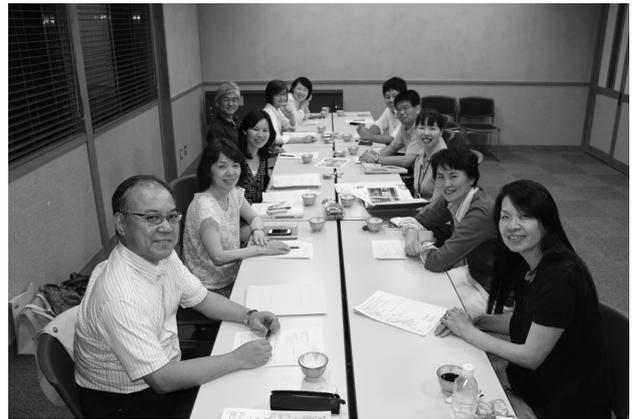
外国語教育サポート事業として、幼稚園・保育園・小学校での外国語活動・国際理解教育サポートも行っている。国際化の時代、柔軟性に富んだ幼・少年期に外国語に親しみ国際理解を深める上でALTやCIRの果たす役割は貴重かつ重要である。特にCIRによる就学前の国際理解教育は、内子町の外国語教育の中でも特徴的な活動である。その他にも実践的なコミュニケーションの機会提供の場となる英語1dayキャンプや中学生対象の英語弁論大会なども行っている。

外国語講座は英語・ドイツ語の2言語・5コースを開講しているが、ドイツ語講座は県内でも珍しく松山市や西予市から受講している方もいる。また、英会話講座の受講生が中心となって「英語劇団」や「外国語ガイドの会」を結成して活動したり、ドイツ語講座受講生が学んだドイツ語を実際に使うことやドイツ文化を知ることが

目的としてドイツへの研修旅行を企画・実施したりして、ただ語学を学ぶだけでなく受講生自身が新たな展開を考え実行している。

海外で研修を行う町民への支援も行っている。この事業は、「潤いと活力あるまちづくり」に寄与し、外国の生活体験を通して国際理解を深めると共に国際感覚豊かな人間性を培うに足りると判断されたものが対象で、協会設立後から現在まで、延べ183名に8,607,655円の助成を行っている。近年、この制度を利用して内子の工芸品や伝統文化など内子の文化の担い手が自らの企画によりローテンブルク市を訪れ、工芸品等の展示・販売や、学校での日本文化体験ワークショップなど、文化交流を始めている。交流の範囲が青少年だけでなく大人にも広がりを見せており、今後彼らだけでなく様々な分野で大人の交流が広がることを期待している。

また、協会設立当初から協会事業の企画・運営はプランナーと呼ばれるボランティアによって進められている。



写真⑧ プランナー定例会

町内外の会社経営者や商店主、教員、子育て中の主婦、大学生、青少年海外派遣団OB・OGなどがプランナーとなり、年齢や立場を超えて、内子流の国際交流の在り方を模索している。プランナーは月1回の定例会のほか、先進的な活動事例を学ぶとともに各種団体と交流、ネットワーク形成を図るため先進地視察研修なども行っている。これまでに海外ではタイやモザンビーク、国内では鳥取県智頭町や徳島県鳴門市のドイツ館、滋賀県大津市の国際交流協会などを訪れた。余談だが、大津市での研修中に出会ったご縁でドイツ人シェフが内子町へ移住、町並保存地区にドイツ料理店を出店された。本格的なドイツ料理の店は西日本でも珍しく、人気の店となっている。

さらに、協会ではプランナーのほかにホームステイ、イベント、日本文化、翻訳など様々な分野のボランティア登録のほか、ボランティア講師による日本語教室開催など国際交流ボランティアの活動を推進している。これは地域の国際交流の担い手となる人材を育成し、その活躍の場を広げることを目的としている。

このように協会事業はたくさんの方に関わっていただくことで成り立っており、このような地道な活動が、町民レベルでの「まちづくりは人づくり」に繋がると考えている。

昨年5月、平成26年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）を内子町が受賞した。受賞理由の一つにローテンブルク市との国際交流事業の取り組みが挙げられている。これは、「町並み保存」をきっかけとした町民レベルでの交流が、着実に成果を生んでいるとの評価を受けたということであり、関わってくださっている全ての皆様に感謝するとともに、今後もこれまで同様のスタイルで交流の歩みを進めていこうという自信に繋がった。

## 6. 今後に向けて

平成26年11月29日、内子座において協会設立20周年記念式典およびシンポジウムを開催した。式典では功労者表彰や感謝状の贈呈などを行い、続くシンポジウムでは、20年の歩みを振り返る基調報告と、「内子町の国際交流～今後に向けての展望～」をテーマにパネルディスカッションを行った。



写真⑨ 協会設立20周年シンポジウム

協会設立のきっかけとなった1993年の「国際交流シンポジウム'93」でもコーディネーターを務めていただいた法政大学現代福祉学部・大学院人間社会研究科の

岡崎昌之教授に今回もコーディネーターをお願いし、海外派遣OBやプランナー、町長、CIR、そして、内子町とローテンブルク市のキューピット役となった国際経済フォーラム代表・瀧口勝行氏の5人のパネリストと共に、内子町の国際交流の未来について考えた。

パネルディスカッションではまずこれまでの内子町の国際交流について振り返り、ローテンブルク市との交流がこれほど積極的に継続されている理由はなにか、交流の主体が町民レベルで積極的に行われていること、交流に共通の哲学（コア）＝町並み保存があることが挙げられた。また、青少年海外派遣事業で250人以上を派遣し、青少年に広い視野を与え様々な活動の土壌になっているが、成果が表れるには長い時間とエネルギーが必要であり、ぶれずに継続的に歩みを進めていくことが大切であるとの意見が出た。さらに、交流とは人間同士の繋がりであり、ゴールもおしまいもないことから、「交流は創造を生む」という信念を持ち続け、今後の交流の中で両市町にキーパーソンやその後継者を作り続けることがとても重要であるとの提言を受けた。

今年5月、出合い（内子シンポジウム'86）から30年・姉妹都市盟約締結5周年を記念し、町長や議会関係者、町民代表、プランナーなど約20名がローテンブルク市を訪問する。町民代表の3名は今回初めてローテンブルク市を訪問する予定で、新たな交流の広がりに期待が寄せられる。また、プランナーが今後青少年だけでなく大人を中心とした交流事業の企画を模索しており、その調査・研究活動も現地で行いたいと考えている。

このような定期的な町民・市民レベルでの「Face to Face」の交流こそが両市町が目指す交流の形であり、シンポジウムでの提言であるキーパーソンの発掘にも繋がると確信している。今後も「まちづくりは人づくり」の観点から町民が主体となったローテンブルク市との交流を軸にした国際交流を続け、内子町独自の個性を大切にしながらまちづくりを推進したいと考えている。

### Profile 久保 理恵子（くぼ りえこ）

内子町教育委員会 自治・学習課 主査  
 1996年 高校1年の時に第2回内子町青少年海外派遣事業に参加、ローテンブルク市等を訪問  
 2003年 松山大学人文学部英語英米文学科卒業  
 2003年 内子町役場入庁  
 2014年 内子町教育委員会自治・学習課にて国際交流係（～現在）